

(写真：UNHCR/Kaoru Nemoto)

キャンプに暮らすブータン難民全員の状況把握をかねた「難民再登録」の作業がようやく11月15日に開始しました。UNHCRとネパール政府との共同事業で、およそ50人のUNHCRの専従スタッフが、一日あたりおよそ1,500人の難民の聞き取り調査と写真撮影、データ入力にあっています。方針確認も含め、現場レベルでは毎日が政府との交渉です。また、再登録の際には、UNHCRの特別な配慮を必要とする事柄についても聞き取り調査を行うので、浮気による家庭の崩壊、親による子どものニグレクト、家庭内暴力や行方不明者の問題などなど、人間ドラマには事欠きません。

1990年代初頭にブータンを逃れてネパールにやってきた当時、政府が難民の登録作業を行い、その後順次出生、死亡、婚姻、離婚、新しいケースなどを記録してはいるものの、10万6千人全体を確認しアップデートするという作業はこれが初めて。再登録作業の際には一人一人写真を撮り、のちに写真入りのIDカードを発行する計画です。自分の写真を見てほとんどの難民が嬉しそうにしていますが、中にはカメラの前で緊張して泣き出してしまう子どももいます。エポックメイキングな事業なので、視察団の訪問も多数。11月24日には外交使節団（日、米、独、スイス、デンマーク、フィンランド、カナダ、オランダ、ニュージーランド）の合同視察があり、在カトマンズ日本大使館の担当官の方も参加してくださいました。こうした機会には、再登録作業の見学はもとより、16年にわたる難民生活に疲弊し解決を求める難民たちの声に接してもらおうと、難民の代表との対話の場を設けています。「私に未来をください」と訴える制服姿の少女の叫びに、大使たちも胸を打たれていました。



写真入りのIDカードを作ります。ちょっと緊張…

12月1日の世界エイズデーには、UNHCRとWFP（国連世界食糧計画）との共催でコンサートを開催しました。難民たちによる「エイズ・ウィルス君と Condom 君の闘い」の寸劇あり、難民のミュージシャンと地元のミュージシャンによるレゲエ・コンサートありの多彩なプログラムで、楽しみながらエイズ撲滅と責任ある性行動を訴えました。難民の老人が飛び入り参加して踊りまくる一幕もありました。気軽に行動に結び付けてもらおうと、医療NGOの協力の下、会場裏にカウンセリング・センターとエイズ検査所を設置。普



おおいに盛り上がった12月1日世界エイズデーの様子

段は難民に対して辛口の地元住民たちも、自分たちの代表がコンサートに参加し、共に楽しめるとあって、難民と受け入れ住民とのジョイントに大変乗り気でした。コンサート開催の場所も、難民と住民の双方が集いやすい場所をと、難民キャンプと地元の町との緩衝地帯を戦略的に選択。WFP に出向していた経験が、コンサートを WFP と共催するのに役立ちました。

最後に、非常に嬉しいお知らせがあります。『日経ウーマン』誌が企画している「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」トップ10の一人として賞をいただきました。先週日本に一時帰国して授賞式に出席し、他の受賞者の皆さんとの交流を通じて多大なる刺激を受けることができました。受賞者の中には社会貢献活動に尽力されている企業家や社会的な使命を事業目的にされている方々が多く、非常に励まされました。当方については「アナウンサー、報道記者から国連職員という異業種への挑戦」、「国際人権人道問題を軸にライフワークを追究しブータン難民10万6千人を支援」ということが主な受賞理由。支離滅裂なキャリアではありましたが、失敗を恐れずにチャレンジしてきたのもこれはこれで良かったのかな、と感じています。UNHCR 職員からは初めての受賞で、今回の受賞が少しでも UNHCR への理解と難民問題への関心の喚起、そして国際協力や人道援助に関心のある若い世代への励ましにつながればと願っています。詳しくは12月7日発売の『日経ウーマン』をご覧ください。

2006年12月11日

UNHCR ネパール・ダマク事務所長  
根本 かおる